

会員近況



四国電力
システム部システム第一課 潮見 統

経営計画のコンピュータ化 現在、経営計画および技術関係業務のコンピュータ化を担当しています。ここで「システム化」ではなく、あえて「コンピュータ化」としたのは、つぎのような反省からです。

昭和40年代なかばから脚光をあびてきた経営情報システムのイメージには、「コンピュータは万能で、これを中核としてシステム化を進めてゆけば理想的な情報システムに到達できる」という幻想があったように思います。「システムとは、人と仕事のしくみと情報の三つから構成され、コンピュータは人が行なう意思決定を情報面からサポートするものである」という明快な事実を目をそむけていたのではないのでしょうか。

このような過程を経て、われわれコンピュータ部門の経営計画分野へのコンピュータ化のアプローチとしては、

- 整然とした体系化よりもむしろ流動的な要求に柔軟に即応できることをねらったプログラム群の整備と、
- これを縦横に使いこなし、部門のニーズに臨機応変に対応できるマンパワーと、
- 迅速、容易にプログラムの修正および計算ができる道具（ハードウェアおよびソフトウェア）の充実、

をトロイカとして、これにユーザー部門との密接な協力関係という御者をのせ、今日も経営計画のコンピュータ化への道を走りつづけています。

ツバロン製鉄(株) (川崎製鉄(株)ツバロンプロジェクト協力本部主任) 三平 武男

ブラジルとOR 日、伯、伊3国によるツバロン製鉄建設のため、ブラジルのヴィトリアにやってきて、50日を経過したばかりなので、ブラジルを語る資格はないが、ORマンの立場から感想を述べてみたい。

第一に、私生活には主体性があり、人生をエンジョイ

しようとする姿勢が強いが、反面、企業活動の中では従属性が強いことを感じる。私生活においては、各自が自分の考え、自分のやり方、自分の評価基準をもっており、他人に褒められたいかというムダな神経は使わない。結婚式や葬儀に参列する人々の服装ひとつをとっても、背広、ブレザー、スポーツシャツと千差万別であり、女性の服装もまた然りである。一方、企業活動では、解決すべき問題があると、どうやって自分たちで処理するかを考える前に、この問題が処理できる既存のシステムはないかをまず検索し、あればそのシステムを買ってしまおうというアプローチをとる。発展途上国にとっては、一番効率的方法なのかも知れないが、すなわち、主体性のあらわれる面が地球の表と裏では反対になっているようである。

第二に、価値感の雄大さがある。とにかく、合理性や経済性だけでは、あのブラジリアは生まれてこないであろう。したがって、ORを定着させるにも、その評価尺度がムズカシイと思う。最後に、年老いたブラジル婦人が私に語った言葉を記そう。「ブラジレイラ(=ブラジル女性)は、日本人との結婚は好みません。何故なら、日本人は朝早くから夜おそくまで働くため、家庭生活が貧弱になるからです」と。

日本電気(株)
技術管理部 中島 勝吉

ソフトへの対応 戦後まず搬送通信装置の開発・設計からスタートし、昭和40年代初には送配電網の制御と通信の全国ネットワークを中東の一角に設置・稼働させ、その後、化学用分析機器を担当して核磁気共鳴装置の国産モデルを開発し、現在は本社スタッフとして技術管理を受けもっております。

この間、はからずも開発途上国・先進国向けのテクノロジー・トランスファを体験し、もっかはソフトウェアとその管理に問題意識をもっております。かつて通信機器の製品といえば標準化されたハードウェアであり、マーケティング・設計などの人的要素は費用的にオーバーヘッドなどのなかで処理されて、受注ごとの製品価格にはほとんど反映されませんでした。その後システム化・フルターンキーベース化からシステム設計・工事をも包含するにいたって、ソフトがコスト要因としてクローズアップし、さらにはコンピュータ・システムとなってそのソフトウェアはハードを凌駕しました。「ソフトへの対応」は何かORの題材になりませんか。